

## セタシジミ資源の概況調査

井戸本純一・久米弘人

### ◆背景・目的

漁獲量が減少しているセタシジミ資源の現状とその動向を把握し、適正な資源管理や効果的な栽培漁業推進の基礎資料とするため、琵琶湖一円の漁場で実際の漁船漁具による採集調査を毎年実施している。なお、セタシジミの漁獲制限体型は、平成18年3月に作成された「琵琶湖セタシジミ資源回復計画」に基づき、漁業調整規則による殻長15mm以下から殻長18mm以下に引き上げられた。

### ◆成果の内容・特徴

- 産卵期である禁漁期間中に漁業者に依頼して主要7漁場を含む18水域で貝桁網を一定時間曳網し、単位面積あたりの漁獲サイズ（選別前の未漁獲サイズを含む）のセタシジミ採集数および体型組成を調査した。
- 2008年6月4日に調査した結果、主要7漁場における1㎡あたりのセタシジミ採集数は平均0.41個体/㎡で、2007年の0.32個体/㎡からやや回復した。
- 水域ごとにみると、採集数は沖島南西と松原で大幅に減少し、長浜、今西で大幅に増加した。
- 体重あたりの産卵数が急激に多くなる殻長18mm以上の採集数は、平均0.13個体/㎡となり、2007年の0.06個体/㎡から倍増した。一方、殻長18mm未満の採集数は0.28個体/㎡で、前年の0.27個体/㎡と変わらなかった。

### ◆成果の活用・留意点

- 殻長18mm以上の大型貝の増加によって今後産卵数の増加が期待されるが、現段階では小型貝の増加に至っていない。
- 単位面積あたりの採集数やサイズの内訳は各水域で年ごとに大きく変動しており、漁獲強度の集散が再生産力に大きな影響をおよぼしていることがうかがわれる。
- 殻長制限による資源管理をより効果的なものにするには、多くの水域で種苗放流等による資源の底上げを図り、再生産力の安定的な回復を早急実現する必要があると考えられる。

表1 貝桁網による主要漁場における単位面積あたりのセタシジミ採集数の推移

水域名 (主要7漁場)	1㎡あたりの採集個体数				
	2004年5月調査	2005年6月調査	2006年7月調査	2007年6月調査	2008年6月調査
沖島南西	0.79 (0.04)	0.39 (0.14)	0.54 (0.06)	0.19 (0.03)	0.08 (0.03)
沖島西	2.60 (0.11)	0.75 (0.05)	1.24 (0.08)	0.54 (0.08)	0.43 (0.09)
沖島東	2.97 (0.53)	0.42 (0.19)	0.21 (0.07)	0.13 (0.05)	0.18 (0.08)
松原	1.30 (0.50)	0.10 (0.07)	0.21 (0.09)	0.27 (0.13)	0.08 (0.08)
磯	2.22 (0.13)	0.73 (0.09)	0.76 (0.26)	0.78 (0.13)	0.91 (0.27)
長浜	2.01 (0.19)	0.33 (0.07)	0.17 (0.03)	0.09 (0.01)	0.46 (0.10)
今西	1.18 (0.13)	0.41 (0.05)	0.45 (0.10)	0.32 (0.02)	0.72 (0.23)
平均	1.87 (0.23)	0.45 (0.09)	0.51 (0.10)	0.33 (0.06)	0.41 (0.13)

( )内は殻長18mm以上の個体数